

詩人としての小川未明 —— 詩集『あの山越えて』の考察

文学研究科日本文学文化専攻博士前期課程修了 増井 真琴

はじめに

詩集『あの山越えて』（尚栄堂、大正三年一月）は、小川未明が生涯に著した唯一の詩集である。未明を評するに際し、「小川未明の本質はハーンがそうだったように詩人なのです」（原子朗「ラフカディオ・ハーンと未明を語る」「ネバーランド」平成一八年七月）というような、未明の詩人性に着目した本質規定は少なくないが（注1）、彼は「本質」以前に、文字通り、詩を紡ぐ詩人であったのだ。

しかるに、未明の詩人としての活動は、従来、必ずしも注目されてきたとは言えない。例えば、『あの山越えて』の先行研究は、論文が一本（畠山兆子「未明文学における「詩」の意味 —— 『詩集あの山越えて』と小説「遠き響」を中心に」「梅花女子大学文学部紀要」昭和六〇年一二月）、準論文が一本（若林敦「詩集『あの山越えて』 —— 小説との対応」「小川未明文学館館報」平成二一年五月）（注2）、エッセーが一本（紅野敏郎「エッセイ 未明の詩集

『あの山越えて』」「未明ふる里の百年」昭和五八年五月）の、計三点があるのみだ。小笠祐二は、未明の童話作家としての側面に比して、「小説家・随想家としての側面は閑却されがちである」（「概説」『小川未明Ⅱ 全小説・随筆』日外アソシエーツ、平成二八年六月）と指摘しているけれど、詩人としての側面も、事情は同様である。

そこで本稿では、未明研究史の影のひとつとも言うべき、詩人・未明の行状に光を当てるべく、詩集『あの山越えて』の考察を試みたい。具体的には、まず、これまでの先行研究では存外無視されてきた、詩集にまつわる基本的な情報——書誌・同時代評・背景——の精査を行う（一節）。次に、本書の詩篇と、その基となった明治三〇・四〇年代の小説群に、どのような対応関係があるのか、両テキスト間の異同を比較検討する（二節）。最後に、詩「淋しい暮方の歌」の精読を通して、本書所収の詩の内容的特質を押さえる（三節）。

明治期の口語自由詩に着目することで、小川未明Ⅱ童話作家とい

う単一的な図式を相対化する視座を得る——それが本稿の企図するところだ。

一、詩集『あの山越えて』——書誌・同時代評・背景

詩を読解するに先立ち、本節では、詩集『あの山越えて』の書誌および同時代評を確認しておきたい。また、詩集が発行された大正三年一月前後の、未明の文壇的位置も見定めておく。

『あの山越えて』の詩は全部で六九篇。出所のわからない二篇を除き、初出はいずれも、明治三七〜四五年の間に集中している（注3）。したがって本書は、大正三年の発行でありながら、実質、明治三〇・四〇年代の詩業であると思ふべき。

だが、この詩集の特異な点は、その初出が総じて、完成した「詩」ではなく、「小説」に内包されているという点だ。つまり、小説の登場人物の吟唱する詩歌や、小説の地の文・会話がそのまま——あるいは、幾分かの修正を加えられて——、「詩」として収録されているのである。若林敦が、「私たちが〈近代詩〉を読み解くしかたで近づくかぎり、これらの詩の意味はまるでちんぷんかんぷん」（『詩集『あの山越えて』——小説との対応」小川未明文学館館報」平成二二年五月）と指摘するように、小説という文脈コンテクスト抜きに、詩を単体で理解しようとすることは、極めて困難と言つてよい（注4）。両者の関係については、次節で詳しく検討する。

同時代評はどうか。管見の範囲では、新聞広告が一点、雑誌の新

刊紹介が二点、文芸評論家の新聞での論及が一点の、計四点が存在する。一様に、先行研究では言及されていない論評なので、以下、順を追って引用・検討したい。

まずは、新聞広告である。

未明氏は詩集はただこれ一つだけである。すべて初期時代の彼の『愁人』や『緑髪』を書いた頃の詩作であつて、悲しい日本の海の色を思はせるやうな、荒れた裾野に淋しく行く白雲を思はせるやうな単純な、素朴な、一種の牧歌である。このきれぎれの歌の裡にもローマンテックの不思議な靈魂は流れてゐる。北方の自然を懐かしみ、北方の海の色を愛するやうな人々に、この詩集をすすめる。

新聞広告（「朝日新聞」大正三年一月二日）

これはおそらく、発行元の尚栄堂が書いた広告文だろう。この短い広告文で、尚栄堂は、未明の詩集が本作しか存在しないこと、第一創作集『愁人』（隆文館、明治四〇年六月）や第二創作集『緑髪』（隆文館、明治四〇年一二月）を著した明治期の詩作であること、未明の郷土である「日本海」や「北方の自然」を喚起させる作風であることをアピールしている。

もっとも、紅野敏郎が指摘するように、「尚栄堂という本屋自体、他にどういふ本を出しているのか、あまり馴染みのない名」（「エッ

セイ 未明の詩集『あの山越えて』小川未明生誕百年記念事業実行委員会編『未明ふる里の百年』昭和五八年五月）ではある（注5）。

次は、雑誌の新刊紹介。どちらも、匿名のため、書き手は不明だ。

詩集である。可憐な童謡風のものもあれば、しほらしい里謡風のものもある。其の何れも諄朴なる作者の感情が極めて自然に流露して、一篇の詩となつたものである。作者は、巻頭に序して、「自然に対して偽りない自分の幼い詠嘆であり、また思慕である」と云つて居る。現下の文壇に於て最も詩人的要素に富んだ未明氏の端的なる感情の流露たる詩を我等の前に示されたことは、未明其の人を知る上に好個の鍵を与へられたやうな気がする。

「新刊紹介」（「新潮」大正三年二月）

小川未明氏の詩集である。未明氏は小説家といふよりも詩人である。曠野のやうに悲しい寂しい人生に立つて、その曠野のやうに悲しい寂しい人生を歌ふ詩人である。本集に収められたものは氏の旧作である。「けれど私には捨てがたい懐しみを覚える。自然に対して偽りない自分幼い詠嘆であり、また思慕であれば」と著者は言つて居る。一句一章悉く作者の内心本然の叫びである。暗い淋しい恐ろしい風の吹くやうな夜、之を吟唱すれ

ばそぞろに涙の滲み出るを覚えるのであらう。

「新刊紹介」（「文章世界」大正三年三月）

「新潮」と「文章世界」の書評に共通して存するのは、未明の詩人性を強調する文章である。すなわち、「現下の文壇に於て最も詩人的要素に富んだ未明氏」「未明氏は小説家といふよりも詩人である」といった評言がそれだ。

これは、未明の文学的感性の鋭さを褒賞する、ある種の修辭レトリックと考えてよからう。同種の言い回しには、例えば、片山伸の「小川君は小児の心を失はない詩人である。私は君が益々本能的に生き、益々諄に生きることを切望するものの一人である」（「序」『白痴』文影堂書店、大正二年三月）といった人物評がある。

最後は、相馬御風の文芸評論の一節。彼は本書に関する、唯一の実名評者でもある。

此の間は本を送つてくださつて、有難う。「あの山越えて」を讀んで居ると、ずっと以前の君を思ひ出すと共に、僕は小頃の自分のや越後の自然が思ひ出されて、たまらなく好い気持ちなる。そしてあの頃の君や僕と、今の君や僕を思ひ合せて、そのあまりに違ひ方の烈しいの自分ながら驚かざるを得ないのだ。でもまだ君の方は僕などに比べると、多分に幼い頃からの心持を失はないで居る。

相馬御風「三月の作品を読んで 五作家に寄する手紙(四)」

〔読売新聞〕大正三年三月一八日

未明と御風は、新潟の高田中学から早稲田大学へとに進んだ、旧知の間柄である。互いに「竹馬の關係」(未明「無責任なる批評 生方・白石両君に」)「読売新聞」大正二年九月三日)、「中学校に通つてゐた以来の友人」(御風「序」『底の社会へ』岡村書店、大正三年九月)と認め合うほど仲がよい(注6)。

その御風が、未明から献本を受けて、綴っているのが右記の一文である。御風は、本書を紐解くと、過去が懐古され、「たまらなく好い気持になる」一方、「あの頃の君や僕と、今の君や僕を思ひ合せて、そのあまりに違ひ方の烈しいのに自分ながら驚かざるを得ない」と、昔日との乖離を痛感している。

加えて未明もまた、本書の序文で「あの時分の思想である。旧作である。けれど私には捨てがたい懐しみを覚える。自然に対して偽りない自分の幼ない詠嘆であり、また思慕であれば。(中略)君(樋口斧太——引用者注)が絵をかくところから、あの時代を紀念にするために、君の絵を入れて此の詩集を出すことにした」と書き記していたのであった。「あの頃」「あの時分」「あの時代」がいつなのか、具体的には明示されていないけれど、両者とも、『あの山越えて』の世界と、現在の自分たちの境遇に、ある種の断絶感を感じている様子が窺える。

では、その断絶とは何か。言うまでもなく、それは、詩が紡がれた「明治」と「大正」という時間の断絶であるだろうし、詩が表象する郷土「新潟」——この点については、三節で詳述する——と「東京」という距離の断絶でもあるだろう。そして未明は、この二つの断絶を経て、この時期、小説家としてのキャリアの転換を行っていた。すなわち、本書が発売された大正三年一月前後は、後から振り返った時、未明が社会主義思想・運動へ接近する起点とも言うべき時期であることが明らかなのである。

まず、文壇的な史実を述べるならば、大正二年六月、大杉栄は「近代思想」の「小説三編」で、未明の小説「嘘」を取り上げ、大杉が未明宅を訪れるなど、両者の間に交友が生まれた(注7)。荒畑寒村も、同年一二月の「近代思想」の書評で「嘘」へ言及。「嘘」に至つては、その真実と深刻とは、驚くべき力で読者に迫り、その徹底的にして辛辣鋭利なる批評のメスは、直ちに入つて社会組織の根底を作せる不正邪悪を貫き抉つて居る。(中略)自分は此の「嘘」の一篇を以て、今年の文壇に於ける傑作の一だと云ふに躊躇しない」と激賞する。

さらに同時期、御風は「人間性の為めの戦ひ 『廢墟』を読んで」〔読売新聞〕大正二年一月三〇日)で、未明の新刊『廢墟』(新潮社、大正二年一〇月)を論じるのだが(注8)、この書評を機に、御風と大杉の間には、「個人革命」と「社会革命」の優劣を論じる論争が巻き起こった(注9)。未明は、突如周囲で勃発した論戦に

対し、「思想上の貴族主義者と平民主義者との争ひが起りさうです」〔最近の感想〕「読売新聞」大正三年一月一八日）と、ビビッドに反応している。

思想的には、御風が、先に紹介した文芸評論「三月の作品を読んで 五作家に寄する手紙（四）」で、「虐げられた人々の生活を書くやうになつて居る君の心持にはたしかにこれ迄には見られなかつた一種の温かみが出て来たやうに思ふ。ダスタエフスキーやゴーリキ一などの胸に燃えて居た一種のヒューマニタリズム（人情主義）が、仄ながらに君の攪き乱された胸の中にも芽を吹きかけて来たのではないか。僕はそこに最近の君の芸術の一新境到^{イノブエ}を認めたい」と述べ、社会的弱者を注視するようになった、未明の変化を指摘している点にも、注目したい（注10）。

事実、未明は「貧富の隔絶最も甚しき社会にあつて、吾等は死力を尽して働いてすら、尚ほ普通の生活をつづけて行くことが困難である。日々社会から肉体上にも、精神上にも、深い傷を受けつつある」（「我が実感より」）「時事新報」大正三年一月五〜七日）と語り、持つ者と持たざる者の絶望的な格差を嘆いている（注11）。この辺りの「近代思想」グループとの接点および下層階級への憐情が、「小川未明なども早稲田派にして比較的早稲田派其の物に囚はれて居らぬ」（XYZ「文壇団体評論 早稲田派を論ず（二）」）「新潮」大正三年二月）などと評される背因だろう（注12）。

明治から大正へかけて、小川未明は断絶^{トキ}を意識せざるを得ないよ

うな思想的変貌を、間違いなく遂げていたのである。

二、テキストの異同 —— 初出（初収）と詩集の間

さて、先に述べた通り、大正期、発行された『あの山越えて』の詩篇には、その詩を内包する、明治三〇・四〇年代の小説群が存在するのであった（注13）。本節では、先行する初出紙・誌（初収本）と詩集の間にどのような差異があるのか、テキストの異同を確認したい。

この点を突いた先行研究としては、畠山兆子「未明文学における『詩』の意味 —— 『詩集あの山越えて』と小説『遠き響』を中心に」（『梅花女子大学文学部紀要』昭和六〇年一二月）がある。畠山は、論考で、小説と詩の対応関係を、Ⅰ型「行替えはあるが、小説の中にそのままの形で含まれているもの」、Ⅱ型「何箇所かに語句の訂正があるもの」、Ⅲ型「内容的にはほぼ同じだが、移動や省略、加筆などがあるもの」の三つに類型化し、各型の事例を表のかたちで引用・紹介した。この作業は、もちろん意義深い仕事なのだが、と同時に、何点か、その限界も指摘せざるを得ない。

一つは、各型の定義が曖昧な点である。例えば、Ⅱ型の「何箇所かに語句の訂正があるもの」と、Ⅲ型の「移動や省略、加筆などがあるもの」の違いは何なのか、今一つはつきりしない。二つは、報告されている事例が、一類型あたり、わずか一、二に過ぎない点である。これでは、全六九篇の中で、各類型が何割程度の比率を占め

ているのか、全容がわからない。三つは、表で使われている小説のテキストが、『定本小川未明小説全集』第一巻（講談社、昭和五四年四月）から引かれている点である。畠山は表を作成するにあたって、初出の新聞・雑誌はおろか、初収の単行本にもあたっていない可能性が高い。

そこで本稿では、上記の限界を止揚するべく、以下の対応を取ることにした。まず、詩の三類型の定義を、次の通り、明確化する。

- I型 初出（初収）の中に詩の原形をそのまま維持しているもの
II型 基本的に原形を維持しているが、部分的に、加筆・修正が見られるもの
III型 大幅な改稿が見られ、原形を維持していないもの

何のための定義かと言えば、要は、初出紙・誌（初収本）から詩集へ移行する際の変化の度合いを、測るためのクラス分けである。いずれの場合も、句読点・括弧・三点リーダーといった言語文字以外の表記の変更や、誤植、改行、漢字の送り仮名の相違は修正点と見做さない。

次に、各類型が『あの山越えて』の中で占める比率を知るべく、詩の基となった、すべてのテキストにあたる。ただし、詩「ひまわり」（二三）（注14）は、今に至るも典拠となった作品が定かでない

ので、調査対象は「ひまわり」を除く六八篇の初期形態だ。

最後に、テキストの調査に際しては、六八篇中、初出が判明している六三篇は初出紙・誌を、初出が判明しているが雑誌を入手できない四篇——「暗愁」（一八）「赤い旗」（二八）「お江戸は火事だ」（四四）「風景」（五三）——と、初出が不明な一篇——「春の夜」（二〇）——は初収の単行本にあたった。

さて、調査の結果は表Iのようなものであった。I型は、六八篇中、「寂寥」（六）「怨み」（一七）「春の夜」（二〇）「唄」（二三）「唄」（二四）「木樵」（三五）「人と犬」（二七）「古い絵を見て」（三七）「お江戸は火事だ」（四四）の九篇が当てはまる。全体に占めるI型の割合は、一三%だ。

I型は大きく三つのタイプに分かれる。一つは、小説に登場する詩歌が、そのまま詩集へ抜粋されているもの（六・二三・二四・二五・二七・三七）。二つは、小説の地の文・会話の一節が詩集へ抜き書きされているもの（二七・二〇）。三つは、もともと単品の童謡として発表されたものだ（四四）。I型は、元来、小説内部において、相対的に自律していた詩歌のテキストが目立つ。

II型は、「西の空」（一）「冬」（二）「木枯」（三）「唄」（四）「曠野」（七）「闇」（八）「夜」（九）「淋しい暮方の歌」（一一）「白雲」（二五）「暗愁」（一八）「梨の花」（一九）「幻影」（二一）「街頭」（二二）「糸車」（二六）「夕暮」（三〇）「木立」（三二）「天気になれ」（三四）「童謡」（三五）「水鶏」（三六）「星」（三八）「菜種の盛

表1 詩集と初出・初収の対応表

№	『あの山越えて』	元のテキスト	初出	初出との関係	初収	初収との関係	詩の原形
1	西の空	水車場	『早稲田文学』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
2	冬	牧羊者	『東京日日新聞』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
3	木枯	水車場	『早稲田文学』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
4	唄	幽霊船	『新古文林』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
5	白い棺	柩	『早稲田文学』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話
6	寂寥	寂寥	『文章世界』	Ⅰ	『北国の鴉より』	Ⅰ	詩歌
7	曠野	寂寥	『文章世界』	Ⅱ	『北国の鴉より』	Ⅱ	地の文・会話
8	闇	闇の歩み	『新潮』	Ⅱ	『闇』	Ⅱ	地の文・会話
9	夜	※森の暗き夜	『新潮』	Ⅱ	『闇』	Ⅱ	詩歌
10	月琴	寂寥	『文章世界』	Ⅲ	『北国の鴉より』	Ⅲ	地の文・会話
11	淋しい暮方の歌	沈黙	『東京日日新聞』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
12	盲笛	鉄片	『新声』	Ⅲ	『北国の鴉より』	Ⅲ	地の文・会話
13	ひまわり	(未詳)					
14	古巢	燕	『新潮』	Ⅲ	『北国の鴉より』	Ⅲ	地の文・会話
15	白雲	雲の姿	『中央公論』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話
16	水星	空想家	『早稲田文学』	Ⅲ	『愁人』	Ⅲ	地の文・会話
17	怨み	暗愁	『ハガキ文学』	Ⅰ	『愁人』	Ⅰ	地の文・会話
18	暗愁	煎餅売	『女子文芸』	(未見)	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話
19	梨の花	暗愁	『ハガキ文学』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話
20	春の夜	寂しめ	(未詳)		『愁人』	Ⅰ	地の文・会話
21	幻影	森の妖姫	『東京日日新聞』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	詩歌
22	街頭	出稼人	『趣味』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話
23	唄	人生	『早稲田文学』	Ⅰ	『愁人』	Ⅰ	詩歌
24	唄	暗愁	『ハガキ文学』	Ⅰ	『愁人』	Ⅰ	詩歌
25	木樵	叔母の家	『むさしの』	Ⅰ	『愁人』	Ⅰ	詩歌
26	糸車	盲目	『早稲田学報』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話
27	人と犬	柩	『早稲田文学』	Ⅰ	『緑髪』	Ⅰ	詩歌
28	赤い旗	歌の怨	『新古文林』	(未見)	『愁人』	Ⅲ	地の文・会話
29	アイルランド	老宣教師	『太陽』	Ⅲ	『愁人』	Ⅲ	地の文・会話
30	夕暮	老婆	『新声』	Ⅱ	『愁人』	Ⅱ	地の文・会話
31	午後の一時頃	霞に雲	『新小説』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話
32	木立	笛の声	『新古文林』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話
33	茶売の舗	漂浪児	『新小説』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話
34	天気になれ	漂浪児	『新小説』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
35	童謡	懂がれ	『新潮』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
36	水鶏	水車場	『早稲田文学』	Ⅱ	『水車場』	Ⅱ	詩歌
37	古い絵を見て	盲目	『早稲田学報』	Ⅰ	『緑髪』	Ⅰ	詩歌
38	星	深林	『趣味』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話
39	菜種の盛り	深林	『趣味』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	詩歌
40	おもちゃ店	長二	『読売新聞』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話
41	お母さん	遠き響	『新小説』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話
42	トツテンカン	遠き響	『新小説』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話
43	沙原	日蝕	『早稲田文学』	Ⅱ	『惑星』	Ⅱ	地の文・会話
44	お江戸は火事だ	お江戸は火事だ	『秀才文壇』	(未見)	『赤い船』	Ⅰ	童謡(単品)
45	童謡	童謡	『少年文庫』	Ⅱ	『赤い船』	Ⅰ	童謡(単品)
46	烏金	烏金	『趣味』	Ⅱ	『闇』	Ⅱ	地の文・会話
47	黒い鳥	不思議な鳥	『趣味』	Ⅲ	『闇』	Ⅲ	地の文・会話
48	明日はお天気だ	遠き響	『新小説』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話
49	森	森の暗き夜	『新潮』	Ⅲ	『闇』	Ⅲ	地の文・会話
50	景色	森の暗き夜	『新潮』	Ⅱ	『闇』	Ⅰ	地の文・会話
51	雲降る	雪来る前	『新小説』	Ⅱ	『闇』	Ⅰ	詩歌
52	さびしい町の光景	烏金	『趣味』	Ⅲ	『闇』	Ⅲ	地の文・会話
53	風景	悪魔	『新文芸』	(未見)	『闇』	Ⅱ	地の文・会話
54	汽車	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話
55	童謡	童謡	『少年文庫』	Ⅱ	『赤い船』	Ⅰ	童謡(単品)
56	童謡	童謡	『少年文庫』	Ⅱ	『赤い船』	Ⅱ	童謡(単品)
57	厭な夕焼	酒肆	『新小説』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話
58	海	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅱ	『惑星』	Ⅱ	地の文・会話
59	上州の山	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話
60	童謡	童謡	『少年文庫』	Ⅱ	『赤い船』	Ⅱ	童謡(単品)
61	黄色な雲	北の冬	『新小説』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話
62	無題	捕はれ人	『文章世界』	Ⅱ	『惑星』	Ⅱ	詩歌
63	妙高山の裾野にて	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅱ	『惑星』	Ⅱ	詩歌
64	解剖室	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話
65	ある夜	麗日	『東京毎日新聞』	Ⅲ	『惑星』	Ⅲ	地の文・会話
66	太鼓の音	鬼子母神	『読売新聞』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話
67	帰途	鬼子母神	『読売新聞』	Ⅲ	『緑髪』	Ⅲ	地の文・会話
68	草笛の音	鬼子母神	『読売新聞』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話
69	あの男	鬼子母神	『読売新聞』	Ⅱ	『緑髪』	Ⅱ	地の文・会話

※「夜」の元の小説は、「夜の喜び」(『早稲田文学』明治44年9月)であると、若林敦のリストには記載されているが、正しくは「森の暗き夜」(『新潮』明治43年8月)であることが、今回の調査で判明した。

り」(三九)「トツテンカン」(四二)「沙原」(四三)「童謡」(四五)「鳥金」(四六)「景色」(五〇)「霽降る」(五一)「風景」(五三)「童謡」(五五)「童謡」(五六)「海」(五八)「童謡」(六〇)「無題」(六二)「妙高山の裾野にて」(六三)「太鼓の音」(六六)「草笛の音」(六八)「あの男」(六九)の三七篇が当てはまる。全体に占めるⅡ型の割合は、五五%だ。

Ⅰ型と同様、Ⅱ型も、小説内の詩歌(一・二・三・四・九・一一・二一・三四・三五・三六・三九・五一・六二・六三)、地の文・会話(七・八・一五・一八・一九・二二・二六・三〇・三一・三八・四二・四三・四六・五〇・五三・五八・六六・六八・六九)、童謡(四五・五五・五六・六〇)へ手を加えた、三つのタイプに分かれる。数的には、詩歌・童謡に対して、地の文・会話を詩化したものが、やや多い。

では、小説と詩の間には、具体的にどのような変化が生じているのだろうか。詩歌↓詩のタイプを、それぞれ比較してみよう。

森の腐れから、孵化した蚊が幾万となく合奏し始めた。(中略)而して彼等は歌った。「生温い夜、少し赤味と紫味を帯だ夜の色。この世界は皆、血色に関連する。赤錆の出た、平な、一枚の鉄板のやうな夜の世界、其の色は、断頭台の血に錆びた鉄の色に似てゐる。残酷な料理をする……吾等は、夜の色を賛美する。」

「森の暗き夜」(「新潮」明治四三年八月)

生温い夜。／赤味と紫味を帯んだ夜の色。／この世界が皆、血色に関連する。／赤錆の出た、／平な、一枚の鉄板のやうな／夜の世界。／其の色は、断頭台の血に錆びた／鉄の色に似てゐる。残酷な料理を／する……。／吾等は、夜の色を賛美する。

「夜」(『あの山越えて』尚栄堂、大正三年一月)

小説の引用箇所は、森の中の蚊の一群が、「酸漿ほおすきのやうに腫れ上るまで生血を吸ひたい」と感じ、一斉に高唱する場面である。

両者とも大筋に相違はないが、「少し赤味と紫味を帯だ」↓「赤味と紫味を帯だ」といった副詞や、「この世界は皆」↓「この世界が皆」といった助詞に、若干の違いがある点を確認できよう。また、あらかじめ断っておいた通り、変化としてはカウントしていないけれど、句読点の打ち方、送り仮名の振り方、三点リーダーの数も、微妙に異なる点は注意しておきたい。

Ⅲ型は、「白い棺」(五)「月琴」(一〇)「菅笛」(一一)「古巢」(二四)「水星」(一六)「赤い旗」(二八)「アイルランド」(二九)「午後の一時頃」(三一)「茶売る舗」(三三)「おもちゃ店」(四〇)「お母さん」(四二)「黒い鳥」(四七)「明日はお天気だ」(四八)「森」(四九)「さびしい町の光景」(五二)「汽車」(五四)「厭な夕焼」(五七)「上州の山」(五九)「黄色な雲」(六一)「解剖室」(六

四)「ある夜」(六五)「帰途」(六七)の二二篇が当てはまる。全体に占める、Ⅲ型の比率は三二%だ。

I・II型と異なり、Ⅲ型は、そのすべてが、小説内の地の文・会話を詩へ転化したものである。以下、具体的に見てみよう。

ああ、彼れかのアイerlandは灰色の空ではなくて、青う澄み渡つてゐる空であつたかと自分は始めて思つた。露けき星の光を見れば、彼あの星はアイerlandの空に輝いてゐるのであらう。而して其の先の北の方が曾て書物に聞いたグリーンランドであらう……と思ふ。春の青い空を見れば、アイerlandが懐かしい！ 自分も一度子供の身となつて、其のやうな緑色の湖水や草の繁つてゐる牧場で夢見るやうな心地で長閑の日を暮らして見たいと思ふ。而して其の度に老宣教師の身の上を思ふのである。

「老宣教師」〔太陽〕明治三九年四月

アイerlandは、灰色の空でなくて、青う澄み渡つてゐる空である。／露けき星の光を見れば、／あの星はアイerlandの空に輝いてゐるのであらうと思ふ。／春の青い空を見れば、／やはり、アイerlandが懐しい。／私に英語を教へてくれた、宣教師の産れた国。／なつかしい、アイerlandよ！

「アイerland」(『あの山越えて』尚栄堂、大正三年一月)

小説の引用箇所は、かつて「英語学者」になることを夢見たものの、現在「一個の行商人と落ぶれてしまつた」主人公が、中学生時代敬慕した、老宣教師の母国・アイerlandへ、空想の翼を拡げる場面である。ちなみに、この「六十近い、赤ら顔の、背の高い」老宣教師は、未明が早稲田大学時代に私淑した、ラフカディオ・ハーンを想起させる人物だ。

前回と同じく、小説と詩の共通する部分に傍線を付したが、逆に言うと、傍線を付されていない箇所は、両者に直接対応する点がないテキストである。本書執筆時に、小説を参照しつつ、未明が書き加えたものであらう。

かくして、『あの山越えて』全六九篇——「ひまわり」を除く——の内訳は、I型九篇(一三%)、II型三七篇(五五%)、Ⅲ型二篇(三二%)であつた(図1)。また、詩の形態としては、小説内の詩歌が転用された作品が二〇篇(三〇%)、地の文・会話を詩化した作品が四三篇(六三%)、もともと単品の童謡として発表された作品が五篇(七%)であつた(図2)。

加えて、本稿で詳述する機会はなかったが、初収本にも限なくあつたところ、I型においては、総じて初出⇨初収⇨詩集の関係が確認できた(注15)。さらに、II型においても、初収本であればテキストの差異がないもの、すなわち、初出⇨初収⇨詩集の関係を持つ作品が複数確認された。また依然、初出・初収⇨詩集であっても、初出に比べ、初収の方が、詩集とのテキストの差異が減じる作品も

図1 I～III型の比率

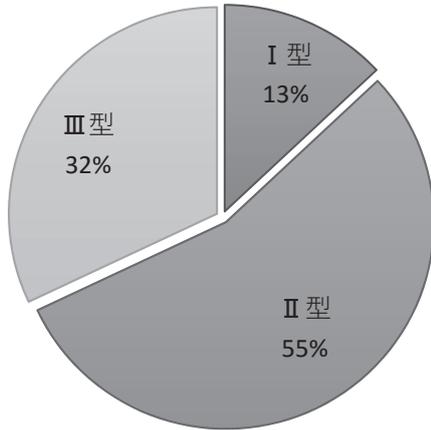
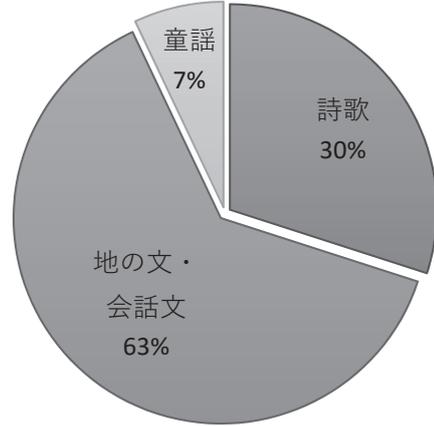


図2 詩の原形の内訳



少なくともなかった(注16)。

してみれば、小川未明は本書の詩を織り成すにあたって、初出紙・誌ではなく、初収本を参照して、複写・改稿していたものと推量するのが、妥当であろう(注17)。

三、「淋しい暮方の歌」——冬の叙景詩

残された課題は、詩を具体的に読み解くことである。本節では、『淋しい暮方の歌』(一一)の精読を行い、もって、『あの山越えて』という詩集の持つ特性を考えたい。まずは、詩の全文を引用しておく。

寒い風が吹きや、枯葦の葉がそよそよと鳴り、／灰色の空が、暮れるとすれば、／里の小川のちよろちよろ水に、一つ星の影がさす。／しぎ一羽、飛んで行く／向うの山を見ると寂しさうだ。／野にも、森にも、雪ふりつもり、／夕飯を焚く麓の里には、薄青い煙が上る。／町の鳥屋へ獲物を売って、／塩買って、米買って、我が家へ戻る。／嬢や、子供が嘸待つてゐやう。／犬の遠吠幽かに、／雪は凍つて石のやう。

この詩はもともと、小説「沈黙」(「東京日日新聞」明治三十九年三月一九日)に内包されていたテキストであり、先の三区分で言うと、II型にあてはまる。「小川のしよろしよろ水」が、「ちよろちよろ水」

に変化した以外は、全文初出・初収の通り。したがって本作は、詩集発行の約八年前、明治三九年三月頃——未明弱冠二四歳頃——の作品と見做してよい一品だろう。

詩の原形は詩歌だった。「雪の降る晩方、一人の寂しさうな乞食が（中略）錢を請願たかる為に」「厳然いかめしい或る家の前」で詠じた、物乞いの歌である。だが、「琴の音」とともに奏でられたこの歌は、「貴族や、金持や、都の人達が曾て聞いたこともない素朴な歌」であり、この邸宅の婦人・富子をして、「覚えず涙を落」とさせるほど、感銘を与えた。結果、富子——ないし富子の家の者——は、「幾何いくばくかの錢」を乞食へ喜捨することになる。

詩の内容は、冬の叙景詩と言ってよからう。それも都会ではない、田舎の冬である。各所に点綴されている、雪に関連する語句（「灰色の空」「野にも、森にも、雪ふりつもり」「雪は凍つて石のやう」や、里・山・野・森といった字句（「里の小川」「麓の里」「向うの山」「野にも、森にも、雪ふりつもり」）からは、十分に近代化されていない、雪国のイメージが喚起される。

翻って、降雪は詩の世界だけではなかった。乞食が琴を掻き鳴らし、富子が感涙する小説の世界でも、雪は降りしきっているのだった。

翻々と、さも面白さうに軽く手を拍つて、接吻をしたり、囁いたり、狂ひつ、舞ひつ、見上ぐれば茫々たる天の原から下界の

方を志して真白な雪が漲り落ちるのである。（中略）ああ、若し雪に目があつたならば、どんな気持で下界の様を見下すであらう。雪は屹度物哀れに下界の夢の領土を見下すに相違ないと思ふ。自分（語り手——引用者注）も雪の身となつて暫時たりとも熱鬧ねっとうの下界を清浄な塵のない天国から、清らかな、恵み深い心を以て眺めたいものである。

「沈黙」（「東京日日新聞」明治三九年三月一九日）

ただし、詩の世界と異なり、富子は地方の住人ではない。富子の夫——三年間のドイツ留学を命ぜられた哲学研究者——は、「今夜は雪も降るのに……横浜へ行つて未だ帰つて来ないのである」とあるから、富子夫婦は、大学にほど近い都市の住人であろう。雪が見下ろす「熱鬧ねっとうの下界」という表現からも、その点は推量できる。

してみれば、「淋しい暮方の歌」とは、雪降る都会で奏でられた雪降る田舎の歌なのであり、都市住民たる富子は、この都市と地方の二重構造の中で、乞食の「素朴な歌」の持つある種の郷土性に感応し、落涙したと考えられよう。

そして、筆者の考えでは、本詩に象徴されるこのような雪国の郷土性の中にこそ、詩集『あの山越えて』の特徴はある。一節で紹介した通り、未明と同郷の相馬御風は、本詩集を捉え、「あの山越えて」を読んで居ると、ずつと以前の君を思ひ出すと共に、僕は小供の頃の自分や越後の自然が思ひ出されて、たまらなく好い気持にな

る」(三月の作品を読んで 五作家に寄する手紙(四))「読売新聞」大正三年三月一八日)と感嘆していたのであった。

何故、「小供の頃の自分や越後の自然が思ひ出され」るのかと言えば、それは未明の詩句に、鋭く郷里を喚起させる力が宿っているからに他ならない。例えば、未明が詩の二行目で使った「灰色の空」という言葉は、御風にとって、越後の「陰鬱な自然」以外の何物でもなかった。

北国——わけでも越後の自然は、驚くべく単調な、そして陰鬱な自然である。春は花が咲き、夏は空晴れて野は緑に、秋は他の国々と同じく紅葉を以て鮮やかに色どられるには違ひないが、さう云ふ色彩の鮮明な期間は、一年のうちでもほんの僅かの間で半年以上は単調な灰色を以て蔽われた自然である。(中略) 毎年十月から翌年の四月までの間は、殆んど毎日のやうに重たい、灰色の空が北越の平野を蔽ふ。

相馬御風「小川未明論」(『早稲田文学』明治四五年一月)

乞食の歌う「灰色の空」が、どこの土地の空であるか、詩や小説には一言も明示されていない。しかし、にもかかわらず、それが豪雪をもたらす「越後の空」であること——少なくとも、越後を基底にしていること——は、御風にとって自明の事実なのであった。

もちろん、このような北越を想起させる詩は、「淋しい暮方の歌」

にとどまらない。詩集『あの山越えて』には、明治三〇・四〇年代の初期小説において、二〇代の未明が繰り返し描出していた越後の自然が、存分に表象されていた。

例えば、小説「寂寥」(『文章世界』明治四四年一月)は、越後を思わせる雪国の獵師・瀧吉が主人公の三人称小説だけれど、この小説から編み出された三篇の詩——「寂寥」(六)「曠野」(七)「月琴」(一〇)——には、いずれも「雪」「白」という字句が多用されている。あるいは、「妙高山の裾野にて」(六三)では、「妙高山」という越後のローカルな地名が、そのまま詩材化されている。詩集発売元の尚栄堂が、「北方の自然を懐かしみ、北方の海の色を愛するやうな人々に、この詩集をすすめる」(『朝日新聞』大正三年一月二一日)といった、詩集と「北方の自然」を直結させる広告文をためらいもなく打つことができたのは、おそらくそのためだ。

そして、一節で紹介した序文や書評に露見している通り、大正三年、三十路を過ぎた東京暮らしの小川未明と相馬御風は、その郷土性に、二律背反的な懐旧と断絶を感じていたに違いないのである。

おわりに

以上、本稿では、小川未明が生涯に著した唯一の詩集である、『あの山越えて』(尚栄堂、大正三年一月)の検証を行った(注18)。未明は童話作家という通念が先行してか、これまで本詩集の研究は、必ずしも進展しているとは言いがたい状況にあったからである。

検証の結果、明らかになったのは、本書の六九の詩篇と明治三〇・四〇年代に書かれた初出（初収）の小説との間には、無改稿（Ⅰ型）・部分改稿（Ⅱ型）・全面改稿（Ⅲ型）の三つのテキスト改変の型が存すること、本書の詩句には、未明の郷土である越後（新潟）の自然が存分に表象されていることである。マイナーな版元ながら、版は最低、五版を重ねており、売れ行きは上々だったようだ。

現在、小平霊園に眠る未明の墓碑には「詩筆百篇憂国情」との碑文が、郷里・春日山の父母の慰霊碑には「故山永に父母を埋めてわが詩魂日本海の波とならん」との碑文が、それぞれ自署で刻まれている。童話を主戦場とする散文作家でありながら、自身の文学活動、ないしは文学精神を、「詩筆」や「詩魂」と形容している点に、詩という表現形式への一方ならぬ愛念が看取されよう。

そして実際、漢詩や口語自由詩を紡ぐ詩人として、小川未明は明治年間を生きていたのである。

注

1 例えば、戦後、未明が芸術院会員へ選ばれた際の新聞記事には、次のような記述がある。「初めのうちの夢見るようなロマンティズムから、徐々に社会主義的な正義感が表面に現れて来たが、昭和十年ごろになると更に生活童話とでもいえるリアリズムへ移っていた。しかしその底に流れているものは常に温いヒューマニズムであり、その意味では本質的には詩人である」（『時の人 小川未明』

『毎日新聞』昭和二八年二月一日）

2 若林敦の文章は、小川未明文学館の館報へ寄稿されたもので、「それにしても、未明の詩には、これまでお目にかかったことがないよなあ……」「こりゃ、小唄だよね」等、文体は一部エッセー風である。が、収録されている詩と小説の対応リストには、十分な学術的価値が認められるため、本稿では「準論文」と区分した。

3 初出紙・誌の判別に関しては、注2の若林敦のリストに負うところが大きい。謝して、お断りしておきたい。ただし、若林が「未詳」としている作品の初出が、その後刊行された、小笠祐二編『小川未明Ⅱ 全小説・随筆』（日外アソシエーツ、平成二八年六月）で判明した例も、三件あった。

4 このような読み手側の制約にもかかわらず、『あの山越えて』は順調に版を重ねていた。畠山兆子は、大正七年一〇月時点で、本書の奥付が五版へ到達していたとし、「発行部数にもよるが、毎年増刷されており、結構売れていたと予想される」（『未明文学における「詩」の意味 —— 『詩集あの山越えて』と小説「遠き響」を中心に』「梅花女子大学文学部紀要」昭和六〇年一二月）と指摘している。

5 ちなみに、『あの山越えて』と一緒に掲載されている尚栄堂の新聞広告には、吉田俊男『英語前置詞用法正解』、小林鶯里『現代紀行文』、高野弦月『美文の花』、『若き人々の美文的書翰文』、『名家名文』がある。いずれも実際、尚栄堂から出版されている書物であ

る。

6 未明の著書『北国の鴉より』（岡村盛花堂、大正元年一月）の巻頭には、「少年時代よりの学友相馬昌治君に献ず」との献辞があり、この一文からも、二人の親交の深さは窺い知れる。中村星湖は、「殊に最近に於て、混沌たる君の思想に灯を掲げた人は相馬君であらうと思ふ。よく喧嘩もするやうであるが、これ位も美しい友情は我文壇稀れに見る所である」（中村星湖・岩野泡鳴・徳田秋声他「小川未明論」「新潮」大正三年一〇月）と述べ、両者に介在する「美しい友情」を指摘している。

7 未明と大杉の接点については、拙稿「小川未明の知識人批判——「童話作家宣言」の真意をめぐって」（『社会文学』平成二八年八月）で論じた。

8 御風は『廢墟』について、「人間性の為めの新しい戦ひを常に吾々に向つて求めて居る、苦しい訴への声」「物質力の暴圧力の為に極度に虐げられつつある哀な人間の叫び声」が聞こえる点が、「私の心を動かす所以」であると、高評価を下している。また、青頭巾は、「未明の『廢墟』」（『新潮』大正三年一月）で、「『廢墟』一篇は暗鬱な情調で貫かれてゐる。十一篇のどの篇を見ても、病氣とか生活難とか此生存の苦痛を描いたものならぬは無い」「どの篇にも、社会組織の不完全を憤る弱者の叫びといふやうなところがある。彼を現実に触れてゐないなどとは今は何人も云ひはしまい」と語り、本書の基底には「社会組織の不完全を憤る弱者の叫び」が流露して

いる旨、指摘している。

9 御風と大杉の論争については、拙稿「転向者・小川未明（上）——階級闘争から八紘一字へ」（『日本文学文化』平成二八年二月）で論じた。

10 凌霄花「小川未明氏の平生」（『文章世界』大正三年三月）によれば、当時未明は、「下層社会の人々の生活」を観察するべく、「神楽坂や江戸川、山吹町の貧民窟」を「毎夜のやうに」散歩したり、「労働者や、若くは卑しい女などから、人生の何物かの刺激を受けやうと思つて」、浅草の「バア」へ出入りしていたらしい。未明は「彼等の言葉こそ本当に人生の真を語つて居ると思ふ」と主張していたそうだ。

11 やや時代は下るが、この嘆きについて、中村狐月は「未明氏の創作が、常に新時代の傾向を有つて描かれるにかかはらず、其思想の主張に他を實行に導く権威のないのは、未明氏の其ういふことは、単に窮迫せるもの、貧しいものが今日の如な状態に在るのは適当に待遇されて居ないと言ふのに止つて居るからである。其等の人々の待遇せられて居る状態が正しくないならば、如何いふ待遇にしなければならぬか、其れを實行するには如何に為なければならぬといふことは、一度も明かにされて居ない」（『小川未明論』『文章世界』大正四年九月）と述べ、貧困を批判しても、それを解決する具体的なビジョンを示すことのできない未明の限界を指摘している。

12 この時期、未明は、自身がいわゆる「早稲田派」と見做される

- ことについて、「党を作り、派を作つてゐる如く言はれるのは迷惑である」（「無責任なる批評 生方・白石両君に」）「読売新聞」大正二年九月三日）と述べ、露骨に迷惑がつている。また、文壇内の学閥についても、「由来文芸上に党とか派とかが出来たものとしたなら、それは早稲田とか赤門とか三田とかいふ学校出身で分けられるべきものでない。寧ろ各自の芸術に対する主義の上からであらう」と語り、批判的な姿勢を示している。
- 13 本稿における「小説」の分類は、原則として、小笠祐二の書誌本『小川未明Ⅱ 全小説・随筆』（日外アソシエーツ、平成二八年六月）の「作品ジャンル」欄に準じる。
- 14 「ひまわり」以下、括弧内の詩の番号は、詩集掲載順に付した。適宜、表1を参照されたい。
- 15 本文で断っている通り、「春の夜」（二〇）「お江戸は火事だ」（四四）に関しては、初出誌が不明・入手不能だったため、初めから初収本にあたっている。
- 16 「夜」（九）「菅笛」（一一）「童謡」（三五）「星」（三八）「森」（四九）等。
- 17 初収本を参照したとする根拠には、戦後の新聞記事「書齋めぐり 作家・小川未明氏」（「毎日新聞」昭和二八年一月二三日）の存在もある。この記事によると、未明は昔から割合すく、書籍を捨てるタイプだったようだ（「小川さんはむかしから本をたくわえない習慣だ」という話なので後の本だに目をやりながらそれに触れる」と「ここにある本はほとんど寄贈されたものばかりで今でも読むとすぐ処分するよ」という）。とすると、未明が既に単行本化された初出紙・誌を、いつまでも手元に残しておいた可能性は低いと考えられよう。
- 18 なお、『新体詩抄』（明治一五年八月）以来の日本近代詩史において、本詩集がどのような位置を占めているのか、文学史的考察を加えるべく、四節「日本近代詩史上の位置——口語自由詩運動の傍系」も用意したが、紙幅の都合上、全面的に割愛せざるを得なかった。別稿を期したい。

Mimei Ogawa as a poet: A study of “Anoyama-Koete”

MASUI, Makoto

“Anoyama-Koete” is a poetry anthology which Mimei Ogawa wrote in 1914. And, in his life, he has never published any other books of poems. That is to say, this anthology is the only work on poetry of all his lifetime.

However, until now, Mimei as a poet has not gotten much attention. Because, he is generally considered to be a fairy tale writer or a novelist. In fact, it is true that there are few previous studies on the rare anthology.

Therefore, this paper aims to reveal Mimei's achievement in the field of poetry by exploring “Anoyama-Koete”. I would like to show his poems are closely related to novels which he wrote in the Meiji era and Echigo area (Niigata Prefecture) where he grew up.